



女王 陛下



の
サーヴァント




目次

第 1 章・事前準備

- 1.1 トレイラー
- 1.2 シナリオの流れと概要
- 1.3 NPC
- 1.4 事前資料
- 1.5 シナリオ中の記号の説明

第 2 章・本編(シティ探索編)

- 2.0 導入(イギリスにて)
- 2.1 アレクサンドリア
- 2.2 カイロ到着&カイロのロケーション
- 2.3 ガーデンシティ・ホテル
- 2.5 「死者の街」
- 2.6 アブディーン宮殿
- 2.7 英国領事館
- 2.8 アムル・イブン・アル・アース・モスク
- 2.9 ムハンマド・アリー・モスク
- 2.10 ブラック博物館



2.11 シタデル

2.12 ザマーレク地区

2.13 指輪の鑑定

3 章・本編(指輪奪還編)

3.1 地下墓所に潜入する

3.2 イスマーイルに会いに行く

3.3 シタデルに潜入する

3.4 夜会に潜入する

3.5 その他の方法(KP 裁量)

4 章・エンディング

4.1 アレクセイの裏切り

4.2 エンディング

5 章・テストプレイ協力者の皆様

第一章・事前準備

1.1 トレイラー

舞台：1879年、カイロ市(エジプト)

時間：5-7時間

人数：2-4人

傾向：クラシックシテイ、共通 HO

推奨：図書館、考古学、変装、隠密、ナビゲート、アラビア語、交渉技能、戦闘技能

舞台は1879年の大英帝国。探索者は、大英帝国諜報機関「黒のウォルシingham」の新人エージェントとして、初任務を受ける。エジプトに於いて発掘された古代の遺物「クヌムの指輪」を回収し、本国まで安全に輸送するのだ。エジプト君主・イスマーイル＝パシャは大英帝国の強い影響下にあり、任務は一見して容易と思われるが……

1.2 シナリオの流れと概要

本シナリオは、『クトゥルフ神話 TRPG』第7版に対応した、1879年のエジプトを舞台とするシナリオです。探索者はイギリス政府の諜報組織「黒のウォルシingham」の新人エージェントであり、エジプトで発掘された古代の遺物「クヌムの指輪」を回収する為にエジプトへ向かいます。

エジプトでは数年前から、首都カイロの地下に広がる古代遺跡の発掘が行われていましたが、野心大なるエジプトの副王、イスマーイルは、遺跡発掘の際に接触した邪教団と共謀し、古代の強大な神・クヌム(シュベニグラス)の復活を企図しているのです。彼は、「クヌムの指輪」がシュベニグラスを召喚し制御する為の秘物である、とする伝承を信じ、彼女の力をかねてからの悲願であったエジプトの自立に利用しようとしたが、その魔力に長らく触れ過ぎたことで墮落してしまいました。イスマーイルは、イギリスからの指輪の要求に対して、地下墓所に副葬されていた複製品を渡すことで誤魔化そうとしており、指輪を手放すつもりは毛頭ありません。

また、彼は、諸外国の外交官や大使を晩餐会に誘き寄せ、クヌム復活の生贄に捧げようと企んでいます。しかし、彼はクヌムを制御する為に必要な呪文を知りません。その呪文は、遠い昔に散逸してしまっており、イスマーイルを使喚したカルティストでさえ、その呪文を知らないのです。従って、彼の計画を止めなければ、探索者は勿論、彼らの祖国イギリスさえも危険に晒されることとなってしまいます。探索者の目的と動機は、スパイとしての任務から、邪神の復活を防ぐものへとスライドしていくことになるでしょう。

本シナリオの基本的なフローチャートは、以下の通りです。

①本国でのフリーフィンガ(イベント)

↓

②エジプト到着(自由探索)

↓

③国王への謁見(イベント)

↓

④指輪の鑑定(イベント)

↓

⑤指輪奪還(自由探索)

(※シナリオクリアの為に、何らかの手段でイスマーイルから指輪を奪還する必要があります)

1.イスマーイルに直接問いたす場合

→拘束されて投獄

→地下墓所からシタデルへ侵入 or 街へ脱出しその他の方法を模索

2.イスマーイルに直接会いにはいかない

→何らかの手段でイスマーイルから指輪を奪還

(※基本的には PL からの提案を推奨)

1 地下墓所からシタデルへと潜入する

2 夜会に潜入する

3 KP 裁量

(※指輪はイスマーイルが常に身につけていることを忘れて下さい。殆どの場合、最終的には彼を何らかの手段で無力化し、指輪を奪うこととなるでしょう。)

↓

⑦アレクセイとの対決、帰還

↓

⑧エンディング

さて、改めて言う事ではないが、KP はセッション中、本シナリオを理に適った範囲で自由に改変することが認められており、またそうする必要に迫られるであろう。

本シナリオは、探索者の選択の自由を保障する為に、KPに多く裁量の余地を残し、柔軟な改変とアドリブを前提として書かれている為である。

勿論、こうした裁定に必要な情報は一定程度シナリオから推測できるように作成されており、柔軟なキープリングに資する為の KP 情報も随所に書き込まれている。

しかし、最終的にセッションに於けるすべてを決定するのは、KP たる貴方である。シナリオは全体の地図であり、探索者の旅路がいかなる景色となるかは、PLと調整しながらも、最終的には導き手である KP が決定することである。

極論、本シナリオを選択式ノベルゲームのように展開しても、手を加えて秘匿 HO 制としても、オールドツクスなクラシックシナリオとして遊んでも、それらは KP の自由である。

1.3 NPC

(※セッション内での KP の自由裁量の余地を残す為、本シナリオでは NPC のステータスを一部のみ設定している。設定されていないステータスに関しては、妥当と判断される範囲で、KP が自由に決定して構わない。)

イスマーイル・パチャ¹

(<https://iachara.com/char/45069/view>)

49 歳。オスマン帝国主権下のエジプト副王。ヨーロッパに倣った近代化政策の推進によってエジプトを発展に導いたが、その代償として西欧列強からの圧力に苦しんでいる。地下墓所の探索中、クヌム(シユブ=ニグラス)の教団と接触、その力を以て列強のくびきからの離脱を試みようとしたが、逆に「クヌムの指輪」の虜となり、「女王陛下」と崇めるシユブ=ニグラスの召喚を試みようとするに至る。彼はこの物語の黒幕である。

STR80 CON60 POW40 DEX50

HP13 MP8 SAN15

拳銃(41 口径リボルバー)60%

近接戦闘(刀剣)60% 拷問 75%

アラビア語 95% 英語 50% トルコ語 60%

クトゥルフ神話 15% 歴史 70%

¹<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%82%B9%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%83%A4%E3%83%BB%E3%83%91%E3%82%B7%E3%83%A3>

ロイター卿 (ポール・ジュリアス・ロイター²)

63 歳。大英帝国男爵。世界最大の新聞社・ロイターの社主。表での情報産業の顔を活かし、大英帝国の為に全世界で諜報活動を行っている。裏の姿はウオルシガムの海外部長であり、探索者たちの直接の上司である。

ジョン・ヴァンシタート・スミス

29 歳。大英博物館の職員で、エジプト考古学を専攻とする若き学者。「クヌムの指輪」の鑑定役として、探索者たちに協力する。

アラビア語 50% 英語 85% 考古学 85%

ヒエログリフ 55% 鑑定 80% 図書館 75%

歴史 65%

アレクセイ・メゼンツォフ

(<https://iachara.com/char/45131/view>)

31 歳。ロシア帝国のエリートスパイ。ロシアの諜報機関「皇帝官房第三部」第三課に所属する、エジプト諜報の責任者。秘かに「クヌムの指輪」の存在を掴み、英国に対抗する為の軍事兵器としてその確保を試みていた。父はニコライ・メゼンツォフ³であり、揺らぎつつある「皇帝官房第三部」の権威を取り戻すため、「クヌムの指輪」の確保に血

²<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%82%B8%E3%83%A5%E3%83%AA%E3%82%A2%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%83%AD%E3%82%A4%E3%82%BF%E3%83%BC>

³<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8B%E3%82%B3%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%BB%E3%83%A1%E3%82%BC%E3%83%B3%E3%83%84%E3%82%A9%E3%83%95>

道をあげている。

STR80 CON85 POW60 DEX75

HP16 MP12 SAN60

キック 70% マーシャルアーツ 70% 組付き 60%

拳銃(41口径リボルバー)85% 応急手当 55%

鍵開け 50% 隠密 65% 聞き耳 65%

追跡 65% 目星 65% 変装 65%

ロシア語 85% 英語 60% アラビア語 35%

心理学 80%

アフマド・ウラビー⁴

(<https://iachara.com/char/43651/view>)

38歳。エジプトの陸軍大佐。強いカリスマ性があり、エジプト陸軍を実質的に掌握している。

エジプトの近代化と独立を目指すナショナリストで、列強からの独立のために絶対的な武力の必要性を認識している。

外国人優遇政策を取るイスマールとは長らく対立していたが、地下墓所発掘後、イスマールがシュブ=ニグラスを軍事転用する攘夷路線を採用した為、重用されるようになった。

STR70 CON80 POW55 DEX65

HP15 MP11 SAN55

拳銃(41口径リボルバー)75%

近接戦闘(刀剣)80%

聞き耳 50% 目星 60% 拷問 80%

アラビア語 75% 英語 50% トルコ語 50%

クトゥルフ神話 15% 歴史 70%

⁴<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%95%E3%83%9E%E3%83%89%E3%83%BB%E3%82%AA%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%83%93%E3%83%BC>

オーギュスト・マリエツ⁵

58歳。カイロのプラーク博物館の館長。フランス人であるが、イスマールに貴族の称号を与えられるなど蜜月関係にある。地下墓所の発掘を指揮しており、博物館には現在不在。クヌム教団の発見後、イスマールにその危険性を指摘したこと地下墓地に置き去りにされ、探索者が発見した時点では狂人となってしまっている。半年に及ぶ地下での生活と死肉食によって、その身体は僅かに食屍鬼へと変貌しつつある。

アラビア語 60% フランス語 85% 考古学 95%

ヒエログリフ 65% 鑑定 85% 図書館 70%

歴史 65% 英語 50% 鉤爪 25%(食屍鬼)

アミーリア・エドワーズ⁶

48歳。イギリスの女性探検家、怪奇小説家。探検家の身分を隠れ蓑に、ウォルシinghamのエジプト支部長を務める。シナリオ内では、探索者の全面的なサポートを行う。

英語 75% アラビア語 60% 考古学 60%

隠密 75% ナビゲート 65% 執筆 65%

応急手当 55% 言いくるめ 70% 拳銃 70%

心理学 60%

⁵<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%82%AE%E3%83%A5%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%BB%E3%83%9E%E3%83%AA%E3%82%A8%E3%83%83%E3%83%88>

⁶<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%9F%E3%83%BC%E3%83%A2%E3%82%A2%E3%83%BB%E3%82%A8%E3%83%89%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%82%BA>

マフムト・イブン・スナー

44 歳。ブラク博物館副館長。エジプト人の考古学者で、特に宗教壁画の研究を担う。温厚で敬虔なムスリム。

アラビア語 80% 英語 35% 考古学 80%
ヒエログリフ 55% 宗教学 70% 絵画 65%

プーシキン・コシチエイ

故人。ロシア帝国のスパイ。アレクセイのパディで、考古学的知識に富む学者上りの諜報員。戦闘能力は低く、「死者の街」の調査中にごろつきたちに襲撃されて死亡した。

ごろつき

スラムのごろつき。スラム特有の倫理観の欠如も相まって、それなりに殺しに慣れている。

STR60 CON55 DEX45 HP11
近接戦闘(格闘)50% 拳銃 35%

エジプト兵

エジプト陸軍の兵士。彼らの多くはウラービーに心酔する下層階級出身の愛国者である。

STR65 CON65 DEX55 HP12

22 口径ボルトアクションライフル 60%

近接戦闘(銃剣)60%(ダメージ 1d6)

目星 40% 聞き耳 40%

クヌムの教団員

エジプトの古代神・クヌム(シュブ=ニグラス)の教団員。カイロの地下遺跡に於いてクヌム信仰を保っていたが、発掘調査によってイスマールを知る所となった。失われたクヌム信仰の復活の為、イスマールを利用しようとしている。

STR60 CON55 DEX65 HP11 MP16
半月刀 60%(1d6+1)

呪文「黒き仔山羊の覚醒」

MP1 につき 5%の成功率で、地下墓所に眠る「クヌムの仔」を呼び起こす。「黒き仔山羊の召喚」とは異なり、既に召喚されている仔山羊を呼び覚ます為の呪文である。処理に関しては、p.47を参照。

クヌム (7 版ルールブック p.321)

古く旧いエジプトの神。

その正体は、地母神シュブ=ニグラス。

クヌムの仔 (7 版ルールブック p.284)

クヌムの邪悪なる千匹の子供たち。

その正体は、シュブ=ニグラスの黒き仔山羊。シナリオ中に於いては、地下墓所に一匹だけ潜んでいるほか、クヌムの召喚後に大量に産み落とされる。

KP 用資料：クヌム

クヌムは、古代エジプトの羊頭の創造神である。エジプト古王国時代に崇拜を集めた極めて古い神で、ナイル川の管理者でもあり、粘土を捏ねて他の神々や人間を作ったと伝えられている。

羊頭の男性の姿をとるが、羊の角は巻き角ではなく、山羊のように水平に伸びている。この羊は、現在では絶滅した古代エジプトの固有種であったと考えられているようだが、本シナリオでは、それは固有種の羊などではなく、山羊であったと解釈し、豊穰や創造を司る山羊神、シュブ=ニグラスこそが、クヌムの真の姿であった、と設定してシナリオを構築している。

なお、一般的なエジプト神話では、クヌムはセトとホルスの争いに於いて中立を維持しており、セト側にいた、とする記述は本シナリオの創作である。これは、セトをハスターの化身とするリチャード・ティアニーの解釈、ハスターとシュブ=ニグラスを親密な関係とするリン・カーターの解釈などに基づき、セトとクヌムを協力関係として描いているためである。

KP 用資料：クヌムの教団(オリジナル)

下ナイルの都市メンデスの守護神、クヌムを崇拜する教団。人身供犠の対価として、クヌム神から異形の仔を含む様々な恩恵を受けていた。

破壊の神セトの教団と長らく同盟関係にあったが、セトの教団が勢力を減ずると共にファラオに接近、クフ王の代には、カイロ地下に座す墓所の警護を任せられるようになる。

共和政ローマ、それに次ぐイスラームによる支配の間、教団は徹底的な弾圧を受け、以降千年近く、地下墓所を拠点に活動するようになる。物資や人員の不足から教団の規模は次第に縮小し、19世紀初めには数十人にまで減少。イスマールによる発掘作業によって、遂に逃げ場を失い発見されることとなった。

イスマールは、彼らから押収した資料を検証するにつれて、クヌムの存在を信じ、エジプト独立のために利用できないかと考えるようになる。教団もクヌム信仰に対する保護と引き換えに政府への協力を申し出、クヌム復活の計画が練られることとなった。

やがて「クヌムの指輪」を通じて魔力に接し続けたイスマールは墮落、目的と手段は逆転し、クヌムの復活を最終目的とするようになった。

1.4 事前資料

※本項の情報は、「探索者が任務に向かう前の事前資料」という形式で、シナリオ開始前に提示することを推奨する。

探索者は、これらの情報を渡された上で、改めて導入に於いてロイター卿から説明を受けることになる。但し、(※)印の KP 情報は開示しないよう注意すること。

・ブリーフィング資料 任務内容

- 1.エジプト王に謁見し、「クヌムの指輪」を受け取って無事持ち帰る。
- 2.上の目的の達成の為に、考古学者ジョン・スミスを警護する。
- 3.可能な範囲で、カイロの外国人襲撃事件について調査する。

・ブリーフィング資料 任務日程

1879.3.10 : 10:00 アレクサンドリア着
1879.3.11 : 15:00 カイロで国王に謁見
1879.3.12 : 予備日
(※KP 情報 19:00 夜会、21:00 クヌム召喚)
1879.3.13 : 10:00 アレクサンドリア発の船で帰還

・ブリーフィング資料 国際情勢

イギリス：ヴィクトリア女王の下、広大な植民地を支配する覇権国家。探索者の所属する「黒のウォルシingham」は、海外での諜報活動や陰謀、要人の警護を担い、陰からイギリスの世界覇権を助けている。

エジプト：形式的にはオスマン帝国の属国。副王(君主)のイスマーイル・パシャは、イギリスやフランスの協力を得て積極的に近代化を進め、アフリカで最も早く近代国家を建設した。イギリスにとってエジプトはインド貿易の重要な中継拠点であり、様々な不平等条約によって半ば植民地化している。

フランス：イギリスに次ぐ列強の位置を占め、アフリカや東南アジアに広い植民地を持つ。イギリスとは各地で対立と協調を繰り返す関係にあり、エジプトにも積極的に進出しようとしている。

ロシア：皇帝アレクサンデル 2 世の治める強力な専制国家。イギリスとはアフガニスタンを巡って対立しており、地中海の要衝であるエジプトも係争地の一つと成り得る。

・ブリーフィング資料 エジプトの要人

イスマーイル・パシャ：エジプトの君主。ヨーロッパに倣った近代化政策の推進によってエジプトを発展に導いた名君であるが、その代償としてイギリス・フランスをはじめとする西欧列強の圧力に苦しんでいる。

ウラービー：エジプトの陸軍大佐で、軍の司令官。エジプトの近代化と独立を目指すナショナリストとして知られている。

オーギュスト・マリエット：フランス人であるが、イスマーイルに個人的に信頼されている考古学者。カイロのブランク博物館の館長であり、地下墓所の発掘を指揮している。

・ブリーフィング資料 クヌムの指輪

1875年より始まったカイロの地下墓所の発掘過程で発見された、古代の遺物。古代エジプトのファラオが、国王の象徴として代々所持していた逸品とされる。エジプト政府は極秘で発掘を進めていたが、政府内に潜入したエージェントからの情報に基づき、イギリスからエジプトに「友好の証としての寄贈」が要求されている。指輪には、ヒエログリフで古代の王クヌム・クフ(クフ王)の名前が刻まれている。まだ学会などの公的な場では発表されておらず、考古学の専門家であれば知っている程度の代物。従って、英国が他国に先駆けてこれを入手できれば、国際的な名声を得ることができる。

・ブリーフィング資料 カイロの地下墓所

カイロ市地下に眠る巨大な迷宮。長らくファラオの眠る墓所として秘匿されていたが、西欧列強の強力な圧力を受け、1875年より発掘が行われている。発掘隊の隊長は、ブラク博物館館長でフランス人学者のオーギュスト・マリエット。発掘はエジプト政府主導で、発掘隊の人員はエジプトに忠実な者に厳しく限定されており、現場は外国に公開されていない。

1.5 シナリオ中の記号の説明

・：一つの情報の単位を示します。

【】：情報を入手する為に使用可能な技能や行動を示します。必ずしも情報の開示はシナリオの記述に縛られる必要はなく、タイミングや必要な技能はKPの裁量に委ねられます。また、正気度ロールもこの記号で示されます。

(※)：シナリオ背景やKP情報を示します。基本的にPLには非公開です。これらは指示ではなく、参考程度の情報であることを忘れて下さい。

「」：NPCによる会話部分や描写例です。読み上げるなどしてお役立て下さい。

第2章・本編（シティ探索編）

2.0 導入(イギリスにて)

探索者たちは、大英帝国諜報機関「黒のウォルシingham」の新任エージェントである。訓練時代の同期である探索者たちは、これからチームを組んで初任務に向かうとのこと、直属の上司・ロイター卿の執務室に呼び出されている。

ヴィクトリア様式の執務室には、新人エージェントである探索者が並んでおり、デスクを挟んで、安楽椅子に腰かけたロイター卿がパイプをくゆらせている。探索者全員が揃ったのを見届けると、座っていたロイター卿が口を開く。

「全員揃ったようだね。ようこそ、「黒のウォルシingham」へ。諸君にはこれから、大英帝国と女王陛下の為にその命を投げ出す覚悟で任務に臨んでもらうこととなる。我々は創設以来数百年にわたり、影日向に大英帝国と王室とを守り続けてきた。君たちがその連綿たる歴史の一部となり、その上にまた新たな一ページを加えてくれることを期待している。」

「さて、これから、諸君らの初任務のブリーフィングを始めよう。諸君らは、ここ数年、エジプトで地下遺跡の発掘が行われていることは知っているかね？ 今回は、そこで発掘された古代エジプトの遺物、「クヌムの指輪」を入手してきて貰いたいのだ。この指輪には大変な学術的価値があり、ぜひとも我々帝国の博物館に収めたいと陛下はお考えである。」

「と言っても、小説よろしく遺跡に潜入して盗み出してこい、と言っているわけではない。現在指輪を所有しているエジプト政府には、既に外務省を通じて引き渡しの話がついている。従って、君たちの任務は、エジプトに向かって国王から指輪を受け取り、無事イギリスへと持ち帰るだけだ。初任務には丁度良い、簡単な仕事だろう」

(※以下、KPは「事前資料」を確認しつつ話をするとPLの理解が容易になるだろう)


「すでに渡した事前資料を見ながら、詳細な任務行程を確認して欲しい。

出発は一週間後、船でリバプールからシチリアを経由し、エジプトの港、アレクサンドリアへ向かう。「貿易商人の一行」という名目でエジプトに入国することになるだろう。アレクサンドリアからは、汽車で首都カイロへと向かい給え。任務期間中の諸君らの滞在先として、カイロの「ガーデンシティ・ホテル」を、人数分確保しておく。イギリス資本による高級ホテルだから、信頼して利用して貰って良い。

2日目の15:00、エジプトの君主、イスマーイル・パシャに、謁見の予定を取り付けてある。こちらの女王陛下からの手紙を見せれば、諸君らが英国の使者であることの証明となる。」

ここまで述べると、ロイター卿は、探索者のうち最も年長の人物に、「イギリス女王からの手紙」を渡す。

(※「イギリス女王からの手紙」：イギリス王室の紋章で封蝋が施された封筒。イギリス女王ヴィクトリアから、エジプト王イスマーイルへ宛てられた手紙が入っている。外交的儀礼に則り、探索者がイギリスの使役であることが明記されている。探索者が陽光に透かすなどして内部を覗き見たとしても、文面に特に不審な点は見当たらないだろう)



「さて、無事に指輪を受け取った後は、現地のイギリス領事館へ向かいたまえ。領事館の地下には、我々のエジプト支部がある。私の名前を出せば、取次ぎをしてくれるはずだ。そこで、ジョン・スミスという男への面会を求めるように。彼は王立アカデミーの考古学者で、今回の任務の協力者だ。「クヌムの指輪」はまだ発見されたばかりで、学会にも提出されず、エジプト政府によって秘匿されているらしい。従って渡された指輪が本物かどうか、専門の学者による鑑定が必要となる。彼に指輪を渡し、鑑定と管理を行わせるように。

任務3日目は、不測の事態に備えた予備日だ。4日目、早朝の船を帰りの便として用意している為、これに乗船して帰国の途に着くように。ジョンに指輪を渡し、適切な管理の下に於いたのち、彼を警護して帰国するまでが、諸君らの任務である」

「最後に、諸君らが今回の任務を単なる「子供の遣い」だと思ひ込まぬように、改めて釘を刺しておこう。この帝国主義の時代において、歴史的な芸術品や遺産の持つ外交的な価値は計り知れないものとなっている。クヌムの指輪の保護に関しても、フランスやロシアといった他の列強諸国が、秘密裏に横槍を入れてくる可能性がある。

また、エジプト国内では、ここ2,3ヶ月、武装集団による欧米人に対する襲撃行為が確認されている。各国はエジプト政府へ厳正な対応を要求しているが、対応は滞っているようだ。こういった状況であるから、単諸君らのように臨機応変な対応ができる人材が適任なのだ。十分に行動に留意し、情報収集を怠らないようにしてくれ。」

「そして、予備日も含めた任務の隙間時間は、決して自由時間ではない。先ほど言った外国人襲撃事件について、できる限り情報を集めておいてくれ。但し、深入りをして本来の目的を失敗しないように。現地での臨機応変な判断はエージェントである諸君らに任されている。エジプト支部の構成員達にもそれぞれの任務がある。今回の任務は、諸君らの腕試しも兼ねているのだ。過剰な期待はしないように。任務の成功を期待している。」

KP 用資料 黒のウォルシガム(オリジナル)

「黒のウォルシガム」は、大英帝国の架空の諜報機関。MI6 の前身。

英国が各地に築いた通信網や資本を隠れ蓑に、諜報・暗殺・在外高官の警護など、大英帝国の覇権の為に活動している。

組織の名称は、エリザベス女王の秘密警察長官、フランス・ウォルシガムに由来する。彼は 20 回以上もの女王暗殺を阻止した有能なスパイマスターであり、好んで黒衣を纏ったことから、敵味方を問わず悪魔のように恐れられていたという。

KP 用資料 クフ王

古代エジプトの力あるファラオ、クヌム・クフ。ギザの大ピラミッドの建設者として著名。「クヌム・クフ」は「クヌム神に守護されし者」を意味する。

ヘロドトス『歴史』によれば、カイロの地下には古代エジプトの迷宮が広がっているとされる。本シナリオでは、彼が自らの墓所としてカイロの地下に迷宮を築かせたものと設定し、後にクヌムの教団がイスラム勢力による弾圧を避けて地下に潜ったことで、彼のミイラはその名の通りクヌムに守られた存在となった。

なお、史実に於いては、クフ王のミイラは未だ発見されていない。

※KP 情報 シティ探索に於いて

本シナリオでは、探索者は、西洋人には「イギリス人」、エジプト人には「西洋人」と認識される身なりをしているものとして記述している。当時の欧州諸国の対英感情、エジプトの対外感情を考慮に入れるならば、セツシオンはよりリアリティのあるものとなるかもしれない。自身の身なりを変えたい場合は、【変装】の出番であろう。

エジプトの上流階級：既得権益層であり、列強との取引によって利益を得ていることが多い。よほどのナショナリストや民族資本家でない限り、西洋諸国は良い取引相手であると認識している。

エジプトの中流階級：中小商工業者にとって、廉価で高品質、関税を免除された外国の工業製品は致命的な存在である。また、知識人階級や軍人は、民族独立運動に参画する傾向が強かった。西洋列強に対して強い反感を抱いており、改革や反乱の指導者となる者もいる。

エジプトの下層階級：廉価な労働力として収奪されるほか、外国商人の買い占めにより、生活必需品や原材料の高騰が発生している。一般に西洋諸国に対しては反感を抱いているが、日々の生活に追われ反抗する気力を失っている者が多い。



※KP 情報：シナリオ前後の時刻表（背景情報）

1875：地下墓所の発掘開始

1878.10.02：クヌムの教団と「クヌムの指輪」と「クヌムの仔」が発見され、イスマーイールはクヌムを用いた武力攘夷を構想する

1878.10月：ウラービーが政権の中枢に参画する

1878.12月：国家戦略会議にて、クヌムを用いた武力攘夷が決定

1879.1月：外国人襲撃計画が始動

1879.3.3：プーシキンがスラムで襲撃される

1879.3.5：プーシキンの残した手がかりを基に、アレクセイがスラムの井戸から地下墓所に侵入する

1879.3.10：10:00 探索者、アレクサンドリア着

1879.3.11：15:00 探索者、謁見

1879.3.12：19:00 夜会 21:00 クヌム召喚

1879.3.13：10:00 探索者、帰還

2.1 アレクサンドリア

探索者を乗せた船は、20日ほどの航海の後、滞りなくエジプトに到着する。エジプト最大の港アレクサンドリアは、多くの商人や船乗りの行き交う賑やかな港である。時刻は昼前、船から降りた探索者たちを、熱っぽい風と強い日差しが出迎える。曇りの多い本国とは明らかに違う気候に、自分たちが異国の地に降り立ったこと、国家の期待を背負って任務に望んでいることを改めて実感するだろう。

アレクサンドリアからカイロまでは車で数時間かかる為、探索者は、ここで昼食を取ってからカイロへ向かうと考えるだろう。アレクサンドリアは西欧の貿易商人も多数出入りしている街である為、西洋風の食事を出す高級レストランもあれば、地元の漁師や労働者が集まる安食堂もある。

・昼食(高級レストラン)

高級レストランに入るならば、探索者は、エジプトの華やかで発展した側面を見ることになる。身なりの整った商人たちが、贅を尽くした食事に舌鼓を打っているのである。商人の殆どが西欧人で、ごくまれにエジプト人商人が居ても、彼らも西洋風の身なりをしている。

探索者は、彼らの豪奢な振る舞いの中に、どこか怯えや警戒の色を見出すだろう。彼らは、店に入ってきた探索者に素早く目を遣り、西欧人であることが分かると、安心した表情を浮かべる。また、彼らの一部は店の外に警戒の眼差しを向けている。

(※カイロで頻発している外国人襲撃事件に関して警戒しているのである)

【聞き耳】によって客の会話に耳を傾けると、彼らは以下のように、エジプト政治に関する不満を交わしている。

客 A 「この半年、実に商売に苦勞するようになったな。イスマイルめ、これまで我々を散々鼻糞にしていたのに、急にエジプト商人どもを保護し始めるとは。」

客 B 「ああ、まったくだ。それにここ最近の襲撃事件……我々も身の振り方を考えなければな。エジプト軍め、口ばかりで一向に捜査が進展しないではないか。」

客 A 「陸軍大佐のウラービーを筆頭に、我々を快く思わぬ者も多いようだからな。これ以上事態が不穏になるようなら、エジプトからの撤退も考えようか」

探索者が話しかけると、彼らは同情したような表情を浮かべ、カイロで頻発している外国人襲撃事件について話してくれるだろう。

「見たところ西欧人のようだが、同業者かね？今の時期にエジプトに来るなんて、運が悪いね。実は、ここ3ヶ月ほど、首都のカイロで、外国人を狙った襲撃事件が頻発しているんだ。商人に外交官に旅行客まで、年齢や性別に関係なく、強盗や放火の被害を受けている。つい一週間前にも、ロシア人の商人がカイロのスラム地区で殺される事件が起きたらしい。ここアレクサンドリアではそういった事件は起きていないが、みんな不安でびりびりしているんだ。エジプト陸軍が捜査に当たっているようだが、進展はしていないようだな。」

「更には、つい半年前までは政府も西欧人に対して下にも置かぬ対応をしていたのだが、急にエジプト商人を鼻糞にするようになっていてね。どうも急にエジプト全体が外国人に対して排他的になっている印象を受けるな。我々西洋人と関係の深いエジプト商人たちも、襲撃こそされていないものの立場は悪くなっているようだ。国王イスマイルも、しばらく前まではそうした宥和派の筆頭だったのだが、外国人商人を取引から除外するなど、急に方針を変えてしまったようだ。今では排外主義者の中心人物、陸軍大

佐ウラービーを重用しているからな。もうここでの商売を諦め、本国に引き返した商人たちもいるよ」

・昼食(安食堂)

安食堂に入るならば、探索者は、エジプトの取り残された陰の側面を見ることになる。ぼろぼろの衣服を纏った薄汚いエジプト人労働者たちが、探索者の感覚では残飯に等しいものを、とにかく腹に貯めようと掻き喰らっているのである。彼らは西欧人である探索者たちを目にとめると、小声で悪態を吐き合っている。【聞き耳】に成功すれば、その内容は次のようなものである。

労働者 A 「おい、また新しい外国人だぞ」

労働者 B 「豚どもめ……俺たちを働かせるだけ働かせて、自分だけが美味しい汁を吸いやがるんだ」

労働者 C 「クソが。この半年くらいで少しずつマシになってきたが、やっぱりイスマイル様じゃ駄目だな。期待できる方はウラービー様しかいねえ……」

労働者 A 「ああ、でも、こんな生活がいつまで続くてんだ……」

労働者 B 「俺も、赤ん坊に服も買ってやれねえ。綿や麻の値段が馬鹿上がりしてるからな。これもあいつら外国人が安くで買い占めていくからだ……」

探索者が話しかけると、彼らは敵対的な態度を取りながらも、幾らかの情報を迂闊に口にするだろう。

「外国人どもめ。早く出て行かねえと、お前らも殺されちまうぞ？ここしばらく、首都のカイロで外国人が襲われる事件が頻発してるみたいじゃねえか。先週にはカイロのスラムで殺された奴もいるみたいだし、早いとこ出て行きやがれってんだ！

半年前ならともかく、今はウラービー様が政治の中心にいらっしゃるからな。お前たちみたいな外国人の商人には厳しい世の中になると思うぜ！」

KP 用資料：エジプトの伝統料理

エジプト料理は、豆や野菜のスープ・煮物、スパイスで調理された魚や鶏肉など、栄養価が高くヘルシーな料理が多く、英国料理に慣れた探索者の味覚を楽しませてくれるだろう。

なお、エジプトはイスラム圏であるため、基本的に飲酒は認められていないが、人口の 10%程度はコプト派キリスト教徒であり、彼らの間では飲酒の文化が受け継がれている。

キーパーリングに有用だと思われるサイトの URL を以下に記載するため、活用して頂きたい。

<https://www.compathy.net/magazine/2016/07/04/15-selections-of-recommended-egyptian-dishes-to-certainly-want-to-eat-if-i-go-to-egypt/2/>

2.2 カイロ到着 & カイロのロケ

ーション

アレクサンドリアから汽車に乗り込んだ探索者たちは、汽車に数時間揺られた後、日没前にはエジプトの首都カイロに到着する。エジプトの首都カイロは、アラブ世界で最も発展した都市である。数千年の歴史の上に、西欧諸国の資本投資によって爆発的に発展した街並みが並び、近代的な、それにて異国風の香りが探索者達の心を弾ませる。カイロには、想像よりも西欧人の姿は少なく、見つけたとしてもその顔は厳しく、どこか緊張した面持ちである。また、街に降りた探索者は、市民全体に活気がないことに気付くかもしれない。住民はみな、外国資本に安くて労働力を搾取されることに疲れ切っているのである。

※カイロ到着後、2 日目 15 時の国王への謁見までの時間の使い方は探索者に一任される。極端な話、カイロの観光に出向いても構わないし、諸外国のエージェントとの接触を避ける為にホテルに引きこもっていても構わないのである。到着直後から探索を行うための妥当な動機付けとしては、万一に備えて外国人殺傷事件の調査を行う、任務対象であるクムムの指輪への知見を深める、などが考えられる。

クムムの指輪と外国人殺傷事件はリンクしている為、基本的には、探索者に与えられた 2 つの任務を忠実に追っていくことで、クムムの指輪を巡るエジプトの陰謀に到達することとなる。

外国人殺傷事件を追うルート：大使館→スラム→井戸/ウラービーの屋敷→地下墓所→指輪奪還

クムムの指輪を追うルート：博物館→館長の家またはモスク→発掘現場または井戸→地下墓所→指輪奪還

以下に、本シナリオで想定するマップ上のロケーションを示す。探索者は、アレクサンドリアとカイロを繋ぐターミナル駅「ミスル駅」に到着することになる。この時代のカイロは、パリやロンドンに範を取った近代的な街並みに改装したばかりであり、洋風の建物が立ち並んでいる一方で、南部には開発から見捨てられた墓地区画が広がり、スラムと化している。近代化が格差の拡大を強烈に促進しているのである。

※ここで、付属資料「カイロのマップ」を公開する。

KPには多少の負担となるが、探索可能なロケーションが多いため、マップに於けるロケーション名の上に透明なチップなどを配置し、マウスオーバーで各ロケーションの説明が現れるように工夫すると分かり易いかもしれない。

※KPは、自身のキーパリング及びシナリオ進行や物語の流れに応じて、任意のロケーションを追加したり、情報の配置を変更したりしても構わない。また、本シナリオはすべてのロケーションを踏破せずともクリア可能な造りになっている。

・大英帝国領事館：イギリスの領事館。地下には「黒のウォルシングム」のエジプト支部が置かれている。

・ガーデンシティ・ホテル：探索者たちの泊所として用意されたホテル。各国の大使館や欧米資本の企業本社が並ぶ街並みにあり、治安は極めて良い。

・ミスル駅：北部にある大きな駅。イギリス資本によって建設され、エジプトの大動脈となっている。港のあるアレクサンドリアへの移動は、ここから行う。

・イスマーイル広場：カイロの西部、ナイル川東岸に広がる商業地域。連日、日没まで多数の露

天商が店を開き、庶民の生活品の多くがここで手に入る。人の多い場所なので、情報を手に入れるにもうってつけたが、外国人の姿は目立つだろう。また、飲食店も多い。

・「死者の街」：カイロの南側に広がる、開発から見捨てられた地区。墓地に浮浪者が住み着き、スラム化している。エジプト兵のパトロール隊も立ち寄りず、犯罪者や非合法組織の隠れ家にもなっている。

・アブディーン宮殿：カイロの中心に位置する王宮であり、政治の中心地である。昨年建設されたばかりのフランス風宮殿で、国王が外国大使との謁見や晩餐会を開く。

・シタデル：アブディーン宮殿の建設まで、エジプト王の宮殿であった古い城塞。現在は国王の日常的な住居となっている。

・ブラク博物館：国営博物館。エジプトに於ける考古学者の拠点。地下墓所の発掘を中心となつて行っている。

・ムハンマド・アリー・モスク：カイロの大モスクであり、エジプトに於けるイスラム信仰の中心地である。

・ザマーレク地区：ナイル川の中州、グズイーラ島に位置する高級住宅街。政府や軍の高官が住宅を構える。

・アムル・イブン・アル＝アース：地下墓所の発掘現場。エジプト政府によって厳重に警戒されている。
(※このロケーションは、初期状態ではマップマスクなどで秘匿すべきである。探索者が「アムル・イブン・アル＝アースで発掘が行われている」との情報を得た場合、このロケーションを開放すると良い)

カイロのマップ

